

過去 500 年のあいだ、西洋世界におけるユダヤ人居住地は、ゲットーとして知られてきた。近代のゲットーは、すべての都市に、中規模の都市においてさえ、その証拠が見いだされるように、その祖先を、ユダヤ人が他の住民から隔離された中世ヨーロッパの都市制度にまでさかのぼる。東方では、近年まで、ゲットーは柵で囲った居住地である「ペイル」の形態をとった。それは、ゲットーのなかのゲットーを表している。ゲットーは、もはや公式に規制されたユダヤ人居住地ではなく、むしろきわめて非公式に発生した文化地域である。アメリカの都市で「ゲットー」の名称があたえられるのは、とくにユダヤ人人口のなかで最も貧しく最も遅れた集団で、通常は、最近到着したばかりの移民が、家を見つけるような地域である。

社会学者の観点からは、制度としてのゲットーは、なによりもまず、長期にわたる孤立の事例研究を示すものとして興味深い。それは、マイノリティが効果的に支配的集団に従属する順応 (accommodation: 応化) の形態とみなされる。ゲットーは、より大きな人口のなかの異教のマイノリティをあつかう少なくともひとつの歴史的形態を示しており、そのようなものとして、統制の道具として役立ってきた。同時に、ゲットーは、根本的な問題について対立しあう集団間に暫定協定を確立する寛容の形態を表している。これらの機能のなかには、べつの点では、中世の制度とははっきりと異なる性質をもっているものの、近代のゲットーによっていまでも役立てられているものもある。しかし、西ヨーロッパとアメリカでは、ゲットーは、基本的に、都市コミュニティにおける人口の分布と類別の現実的過程を示すという理由で興味深い。それは、文化集団が、なじみのない生育地に移植された場合に、自分たちの遺産を表現する方法を示している。それは、ある人口のなかで繰り返し篩にかける過程が進行していること、各地区に立地を割り当てるのに作用している要因、コミュニティがその整合性と連続性を維持する諸力などの証拠となる。最後に、ゲットーは、この文化的コミュニティがそれを取りまくより大きなコミュニティと混合する程度にまで変容しながら、その一方で、古くからの紛れもない雰囲気をもさまざまに変貌する外観のうちに出現させる微妙なやり方を示している。

本稿は、ゲットーの歴史ではなく、ゲットーの自然史に関心を寄せている。この角度から見ると、ゲットーの研究は、数多くの関連する現象を解明することになりやすい。たとえば、隔離された地域の起源や地域コミュニティ一般の発展などである。なぜなら、ゲットーは、厳密にはユダヤ人の制度である一方で、たんにユダヤ人だけを含むのではないゲットーの形態があるからである。われわれの都市には、リトル・シシリー、リトル・ポーランド、チャイナタウン、ブラック・ベルトなどがある。ボヘミア街やホボヘミア [渡り労働者街]、スラムやゴールド・コーストのようなところ、悪徳地帯やリアルト [場末の劇場街] のようなところが、すべての大都市コミュニティにある。これらの地域を形成し発達させる基礎となる諸力は、ゲットーに作用している諸力ときわめて類似している。これらの形態のコミュニティ生活は、ユダヤ人ゲットーについてなにか知るところがあれば、理解しやすくなる。

ユダヤ人が中世都市の隔離された地域に集中していたことは、教会や国家の公式の布告に起源があったわけではない。ときに誤って信じられているが、ゲットーは、当局によって、外国人をあつかうために設計され、任意に生みだされたというわけではない。ゲットーは、だれかが意図した産物ではなく、むしろユダヤ人自身の宗教的・世俗的な習慣と遺産に根ざす必要と慣行から、知らず知らずのうちに結晶化したものである。それが強制的になるずっと以前に、ユダヤ人は、西欧の都市において、自発的に分離された部分に住んでいた。ユダヤ人は、外部からの圧力や周到な意図によらずに、分離された文化地域に流れ込んだ。ユダヤ人による地域的に分離されたコミュニティの創建に向かって作用した要因は、ユダヤの伝統の性格に、ユダヤ人自身だけでなく中世都市居住者全般の習慣や慣習に、求められる。ユダヤ人にとって、空間的に分離され、社会的に孤立したコミュニティは、自分たちの宗教的な教え、確立された儀礼と食習慣、そして個人を家族的・共同的制度に結びつける数多くの機能にしたがうのに最良の機会を提供するように思われた。いくつかの例では、疑いもなく、かれらにたがいの交際を追求させるようにしむけ、あるいはかれらを保護する支配者が、税収と統制の目的で、かれらに分離された街区を付与することが望ましいと気づかせたのは、人口の他の部分からの脅威であった。中世生活の一般的な傾向は、疑いもなく重要な役割を果たしていた。なぜなら、同じ職業集団の成員が同じ場所に住む習慣があり、ユダヤ人は、全体として分離された職業的部類を形成し、独特の経済的地位をもち、それゆえ、だれもがある場所に結びつけられるという中世社会の枠組みにたんに一致していたからである。加えて、コミュニティ生活における重要な要因として、団体精神を発達させる親族関係と知人関係の数多くの紐帯があった。共通の言語、観念と関心のコミュニティといった事項があり、同じ場所の出身で知らない場所で出会った見知らぬ人のあいだで生じる親近感があった。最後に、ゲットーへのユダヤ人の隔離は、多くの点で、隔離された地域一般の発達と同じであった。移民の居住地、ラテン街、悪徳地域、そして人種的居留地で、なじみのない生活様式が必要とし見いだす寛容性は、都市人口を、篩にかけ、住民が敵意のある批判から免れ、類似した精神をもつ集団の支援を受ける、分離された地域に配分する強力な要因である。

ユダヤ人がキリスト教徒の隣人から地域的に分離されていることに対応して、ふたつの集団のあいだに機能的な分離があることが明記されるべきである。ゲットーの壁を越えたところにある世界がゲットー内部の生活にとって外部的であるのと同様に、ユダヤ人と非ユダヤ人のあいだの個人的関係は、外面的で功利的な関係であった。ユダヤ人は、中世ヨーロッパの生活の経済的複合体を補完していた。かれらは、町の住民が遂行できない数多くの機能を果たしていた。ユダヤ人は、交易と交換に関与することを許され、教会がキリスト教徒に従事することを許さなかった職業に従事することを許された。そのうえ、ユダヤ人は高価な課税資産であり、必要とされる税収の財源として頼りにすることができた。他方、ユダヤ人も、キリスト教徒の住民を、目的に対する手段、効用とみなした。キリスト教徒は、牛肉の後四半身を食べるといったような機能を遂行することができ、ユダヤ人が売りに出す商品を購入することができた。キリスト教徒は、ユダヤ人から借金をして利子を払うことができた。キリスト教徒は、ユダヤ人が自分ではできない無数のサービスをユダヤ人のために遂行することができた。中世生活の厳格な構造のなかで、ユダヤ人は戦略的な場所を見いだした。中世の教会の態度は、交易と金融を罪と結びつけた。キリスト

教徒の住民にとって、商人や銀行家を望ましくない職業にしていたと思われるこのタブーから、ユダヤ人は自由であった。キリスト教徒の聖職者は、「ユダヤ人の魂の危険」について悩まされることはなかった。なぜなら、かれらの知るかぎり、ユダヤ人は救済すべき魂をもちあわせていなかったからである。しかし、交易関係を可能にしたものは、たんにそれがたがいにより有利であるからという事実だけではなく、交易関係は双方の住民のあいだに他の形態の関係が生じ得ない場合に可能となるという事実もあった。ユダヤ人は、異人として、分離された別個の部類に属する者として、商人と銀行家になるのに見事に適合的であった。ユダヤ人は、交易が可能で儲かる町や都市に流れ込んだ。ここで、かれは放浪の過程で発達させた遠距離の接触のすべてを活用することができた。コミュニティ全体へのコミットメントはわずかなものであり、必要であれば、より大きな機会のある場所に移住することができた。ユダヤ人は、自分を縛り付けている不動産を所有していなかったし、封建領主の農奴でもなかった。かれの移動性は、つぎに多才性を発達させた。かれは、場所に、地元民が見つかることのできない機会を見つけた。ゲッターは、一時的な停泊地以上のものではないが、ユダヤ人はホーボーではなかった。なぜならユダヤ人には目的があり、目的地があり、移住してもコミュニティは自分とともにあったからである。

ユダヤ人の外部世界との接触は、カテゴリカルで抽象的であったが、自分自身のコミュニティの内部では、くつろいでいた。ここで、ユダヤ人は作法や形式主義を緩めることができた。ユダヤ人の仲間との接触は温かく、親密で、自由であった。とくにこのことは、家族に当てはまった。かれは、内部集団から、より大きな世界では提供することのできない感謝と共感的理解を受け取った。自分自身のコミュニティは、それを構成する家族の連帯性にもとづくものであったが、そこではかれは地位のある人間であった。遠隔地の市場への旅行や日々の仕事から帰ってきたときはいつでも、かれは家族集団に戻り、そこで人として、ユダヤ人として再生され再確認された。親族から遠く離れている場合でさえ、かれは、夢と希望のなかで親族とともに真に内面的な生活を送っていた。かれは、共通の苦悩、無数の儀式と感情によって、ゲッターの制限を超えた世界に無関心な生活を送っている小集団に結びつけられていた。この集団の支援なくして、つまり友人と同郷人の内部集団においてかれが享受した安心感なくしては、生活は耐えがたいものであったであろう。

周囲に適応しようとするユダヤ人の試みの過程で、自然に自発的に発生したコミュニティ生活の形態は、しだいに慣習と先例のなかに形式化され、最後に、法律の制定に結晶化された。ユダヤ人が特権として追求していたものは、すぐさま法律によって自分たちに押しつけられるものとなった。ユダヤ人は中世の経済においていっそう重要な位置を占めるようになり、十字軍の時代の教会は、いっそう戦闘的になったので、積極的な規制の時代が始まった。ゲッターは強制的なものとなった。しかし、ゲッターの制度は、このときまでにユダヤ人の習慣と態度に固く根ざすようになった。ゲッターの歴史家は、通常、ユダヤ人の周囲に建てられた障壁のもつ制限的な効果を強調しがちであり、ゲッターの存在の偏狭で停滞的な性格を強調しがちである。それにもかかわらず、おそらく外部の生活よりも活動的なゲッターの内部に、活気のある生活があったことを、歴史家たちは忘れていた。

ユダヤ人とキリスト教徒の振る舞いを規制するようになった法律は、人びとのなかにすでに深く染みこんでいた社会的距離の公式的な表現にすぎなかった。一方では、ユダヤ人はますますひとつの部類——ひとつの抽象——の成員となったが、他方では人間としてか

れに反応する傾向が持続していた。ゲッターはユダヤ人に自己意識をもたせた。ゲッターの生活が耐えられたのは、多くのユダヤ人がしばしば束の間の一瞥以上のものをあたえたより大きな外部世界があったからにはほかならない。その結果、かれらはしばしばふたつの世界の周辺で生活した。ゲッターの壁の地平を越えたところにある広い世界にひきつけられ、内部の狭い生活に束縛されていると思われた人びとの側では、ゲッターから逃れる動きがつかねにあった。ときにユダヤ人は、ゲッターを離れて、改宗したであろう。そしてときに、これらの改宗者は、矢折れ、辱めを受けて、ゲッターに舞い戻り、自分たちの民族のなかでしか見いだすことのできない温かい、親密な、部族生活を味わったであろう。そのような場合に、背教者の冒険物語がゲッターの通りで話され、コミュニティ全体が、迷える成員がコミュニティに再編入される厳粛な儀式のただなかで、固い集団にまとまったであろう。

ゲッター・コミュニティの内部の連帯性は、つねに家族生活の紐帯にあり、シナゴグにおける組織によって、これらの家族はコミュニティ内に地位を獲得した。ゲッターという狭い地域の制限のなかで、リーダーシップの能力を発揮する豊富な機会があった。ゲッター・コミュニティは、細かく専門化され、高度に統合されていた。外部のより広い世界よりも狭いゲッターの通りの内部のほうが、独特のタイプのパーソナリティと制度があった。

典型的なゲッターは、人口密度が高く、壁に取り囲まれていて、たいていは、商業の動脈の近くか、市場の近くにあった。ユダヤ人街は、強制的ゲッターの時代以前でも、シナゴグの周囲に成長したように思われ、シナゴグは宗教的にも地域的にもユダヤ人の生活の中心にあった。すべてのゲッターに共通する特徴は、墓地であり、それは並外れた感情的な関心が付与された共同責任であった。数多くの教育施設、レクリエーション施設、衛生施設があり、たとえば、青年のための学校、浴場、食肉処理場、パン焼き場、ダンスホールなどがあった。ゲッターの壁の内部の緊密な生活においては、個人の工夫に残されているものはほとんど何もなかった。生活はよく組織されており、慣習と儀礼は、ユダヤ人コミュニティの高度の組織をいまなお説明する、しばしば過度の制度化の寸前にある制度化の役割を果たしていた。これらの制度は、既成のものとして発生したわけではなかった。それらは、生活がつねにそうであるところのもの、すなわち、ある民族の物理的・社会的ニーズへの適応を表している。とくにこの場合には、集団内部の対立と無秩序および外部からの圧力をあつかう制度は、ゲッターが象徴し、強制した孤立への特徴的な順応形態であった。このことは、ゲッターの制度によく当てはまるだけでなく、そのまわりに集まっている役人やパーソナリティにもよく当てはまる。今日われわれが知るように、ユダヤ人は、それ自体、ゲッターの産物なのである。

ゲッターは、生物学の観点からは、閉鎖的なコミュニティと呼ぶのが適切である程度にまで、閉鎖的な同系交配の、自己永続的な集団であった。異民族との結婚がなかったわけではないものの、こうした異民族との結婚は通例、ゲッターに属さなかった。ユダヤ人は、宗教的・人種的偏見のもつ大きな力、すなわち隔離と孤立が、独特の身体的・社会的タイプをひきおこす古典的な例として、しばしば、適切に指摘されてきた。これらのタイプは、概してゲッター生活とその効果が相対的に不変のまま継続するかぎりにおいて持続する。このことは、東欧とオリエントの場合に最もよく当てはまる。コミュニティ生活の相違は、

おおむね、ユダヤ人住民内部のさまざまな地域的集団間の違いを説明する。

ロシア系、ポーランド系、そして一部はルーマニア系ユダヤ人は、いくつかの基本的な点において、西欧系——ドイツ系、フランス系、オランダ系、イギリス系ユダヤ人——と異なっている。長期間にわたって、東欧のユダヤ人は、西欧のユダヤ民族にたんに文化的に従属する辺境であった。ロシア、ポーランド、リトアニアで独立した文化生活が発達したとき、それは、より広い世界から切り離された自己充足的で自己完結的なものであった。西欧のユダヤ人はそうではなかった。かれらは、思想の潮流とルネッサンス以降のヨーロッパ生活を特徴づける社会変動にけっして鈍感ではなかった。東欧のユダヤ人が大部分、村落コミュニティ、村の世界に住んでいた一方で、西欧のユダヤ人は圧倒的に都市住民であり、近傍や遠方の交易と金融の中心地とつながり、少なくともときおり、世界の鼓動する知的生活に触れていた。ライン地方の都市のユダヤ人が、思想家や実業家と交際していた一方で、ロシアの同胞は農民や教養のない退廃的な封建貴族とつきあっていた。西欧のユダヤ民族がすでに、近代主義的な宗教運動、政治運動、社会運動で沸き返っていたとき、東欧のユダヤ人は、まだ神秘主義と中世的儀礼に浸されていた。西欧のユダヤ人が進歩の潮流に沿って動いているときに、東欧のユダヤ人は、村人や農民の非ユダヤ的世界の遅れと孤立を共有していた。19世紀の中頃までに東欧のユダヤ人は、西欧のゲットーユダヤ人のように物理的な運動が制限されていたわけではなかったけれども、東欧のユダヤ人は狭い世界、厳格さと安定性を特徴とする世界に住んでいた。そしてかれらが都市に群がり、そこで全人口のうちで優勢を占めるようになるのと、かれらは、たんにこれらの都市を西欧の都市中心地となんら共通性のない大きな村にただけであった。近代ユダヤ・コミュニティの地域生活の多くの特徴には、最初に西欧から、つぎに東欧からの継続的な移民の波の痕跡が残されている。

ゲットーをユダヤ人の法的な居住場所にした公式の法律は、世界のほとんどの国において19世紀中頃にむけて廃止された。奇妙なことに、法的なゲットーの廃止は、百年前までユダヤ人の大部分に反対された。なぜなら、かれらは、ゲットーの壁を壊すことは、公式のゲットー規則が象徴していた分離されたコミュニティ生活を一扫することを意味するであろうと予感していたからである。新しい自由のなかに、ユダヤ教の影響の浸食と、分離されたコミュニティにおけるユダヤ人の生活の最終的な溶解を見て取っていた人びとは、自分たちを慰めるものがふたつあると考えていた。(1) 法律によって命令された公式的な平等は、ユダヤ人にとって即座の受容と、仲間の市民のあいだでの同等の社会的地位を獲得するものではなかった。(2) 西欧のユダヤ民族は崩壊しつつあるように見えるけれども、ビスワ川の対岸では、排除と抑圧が形づくった古い結合にしがみついている600万近くのユダヤ人がいた。しかし、それ以降、ロシアでさえ革命が起こり、ユダヤ主義のいわゆる「最後の防壁」は消滅に脅かされている。

ゲットーの発生が、法律によってユダヤ人を隔離された地域に強制居住させる以前であったのと同じように、これらの法律が破棄されたのちも、ゲットーは存続する。イスラエル・ザングウィルはこう述べた。「2世紀間ゲットーに住んでいた人びとは、たんに門が倒されたというだけで外へ踏み出すことはできないし、黄色のバッジをはずすことで魂の汚名をぬぐい去ることはできない。外部からの孤立は、かれらの存在の法律になったよう

に思われる」¹⁾。ゲットーの公式の廃止と市民権の付与がユダヤ人におよぼした影響は、解放宣言が黒人におよぼした影響のようなものである。奴隷は、たんなる法的関係以上のものであり、ゲットーは法律以上のものであった。それは制度となっていたのである。ゲットーの物理的壁は打ち倒されたものの、孤立という見えない壁はユダヤ人と隣人のあいだの距離をいまなお維持している。

世界のあらゆる部分で、ほんの一握りのユダヤ人がいるだけの町においてさえ、多少ともはっきり組織されたコミュニティが見つかるだろう。その発達に入り込んでくる生態学的要因は、本質的に、中世のゲットーの生態学的要因である。内部からの伝統の連続性と外部からの偏見とはべつに、とくにアメリカ都市において近代ゲットーの持続を説明するいくつかの事項がある。これらのうちのひとつは、ユダヤ人のあいだの植民運動である。それによって旧世界のコミュニティは、ときには新世界において保持された。しかし、そのような組織された努力が存在しないところでさえ、ユダヤ人コミュニティがその古い環境を永続させる傾向がどの程度まであるかは注目に値する。

かなりの程度まで、近代ゲットーは、正統派ユダヤ主義の教えと慣行によって、すなわち、シナゴグ、学校と儀礼的浴場、コーシャの肉屋やコーシャの乳製品販売所の近くに住むことの必要性によって、必要とされた。しかし、宗教の遵守と儀礼的慣行に無関心な人びとにとってさえ、ゲットーに住むことは社会的・経済的事情によって必要とされた。新しい国の言語、労働条件、一般的な習慣と思考様式に無知であり、迫害の地からの亡命者が自然な成り行きとして臆病であったために、ユダヤ人移民は、宗教仲間の居留地に住むことを余儀なくされた。自分たちのなかで、ユダヤ人は完全にくつろぐ。かれは比較的順調に雇用への道を見いだす。そして職を得る努力が遅れても、その期間に何人もの人からの慈善によって援助を受ける²⁾。

ユダヤ人と非ユダヤ人のあいだの接触が何世代も続いた国で、ユダヤ人が古い地位を保持していた他の国からの新しい移民が発生しなかったところでは、ゲットーはおおかた解体した。こうした状況のもとでは、ゲットーが消滅する傾向があるだけでなく、人種もそれにとまって消滅する。教育と商業と芸術をつうじて世界と接触することは、ゲットーの文化的価値に代わる世界全体の文化的価値をもたらす。この接触は、さらに、しばしば、異民族との結婚をもたらす。それはもっともしばしば、ユダヤ人と非ユダヤ人のあいだの交際が禁止されていない場所で起こりやすい。世界中の現在 1550 万のユダヤ人は、紀元の始まりの西欧世界において、もともとユダヤ人であった居住者の現存する子孫のうちのごく一部にすぎない。かれらは、ユダヤ人のアイデンティティを人口の一般的な流れのなかに失ったもっとずっと大きな集団の残余にすぎない。ユダヤ人に起こったことは、本質的に、近年のすべてのマイノリティ集団に起こったことである。孤立の障壁が後退するにつれて、社会的交際と異種混交は、その集団の規模を縮小させ、その独特の特性を周囲の

1) *Children of the Ghetto*, p.6

2) Israel Cohen, *Jewish Life in Modern Times*, pp.37-38.

特徴に平準化してきた。

ユダヤ人コミュニティは、ある点では、外部世界と容易に交際する障害が取り除かれたあとまで存在するといわれるかもしれないが、それは特徴のないコミュニティになる傾向がある。しかし、西欧ととくに米国のほとんどの大都市の場合にそうであるように、新しい移民の確固とした流入が、解体しつつあるコミュニティを補充し、そこで、特徴的な地域的色彩をもったゲットーが成長し、維持されてきた。そのようなコミュニティがシカゴのゲットーである。

西欧のゲットーが、東欧およびオリエントのゲットーと異なる点は、前者は少なくともふたつの部分、自国生まれと外国人からなっていることである。自国生まれの部分は、商業施設から便利な距離内に、ある種の集中によって住んでいる。物質的な繁栄が生じると、より良い地区に移転し、そこに新しいユダヤ人地域が生みだされるが、それは外部的な特徴によって周囲から区別されることの少ない地域である。しかし、外国人の部分は、密度の高い集中の状態に住んでいる。かれらは貧困のために、町の貧民街に居住し、そこではかれらは、新しい環境が許すかぎり、自分たちが生まれ育った社会状態を再現する。東欧のゲットーは、政治的束縛のシンボルであるかもしれないが、西欧では、ゲットーが典型的に示している束縛は、経済的地位、感情および伝統によって実行されるものにすぎない³⁾。

あるひとがどのような種類のユダヤ人であるかを知りたければ、どこに住んでいるかを訊けばよい。住んでいる地域ほどユダヤ人の性格を示す単一の要因はほかにないからである。それは、かれの経済的地位、職業、宗教の指標であるだけでなく、政治と人生観、そしてかれが到達した同化過程の段階の指標でもある。

シカゴ川の西、中心業務地区の影に、シカゴの移民居留地、なかでもゲットーのより大きな部分を代表する密集した借家のある人口稠密な長方形の地域がある。それは、世界の類似した地域に見いだされる最もさまざまな種類の人びとを含んでいる。この地域は、シカゴにきた事実上すべての移民集団の溜まり場であった。この地域がユダヤ人によって占められるのは、たんにある人口集団がべつの人口集団によって押しのけられてきた継承の長い過程の一局面にすぎないように思われる。しかし、この過程には紛れもない規則性がある。都市が成長し、移民の新しい集団がスラムに侵入する過程で、ユダヤ人とその他の民族集団のあいだの定常的な交際が結果として生じる。各人種的・文化的集団は、地代、生活水準、アクセシビリティそして寛容性の観点から、旧世界の生活を最も容易に再現する都市のこの部分に住むようになる。移民のこうした潮流が侵入する過程で、ゲットーは成長しすぎた村の外周から、ほとんど一世代のあいだに大都市のスラムに転換した。ユダヤ人は、継続的に、ドイツ人、アイルランド人、ボヘミアンに取って代わり、自分たちは、ポーランド人とリトアニア人、イタリア人、ギリシャ人、そしてトルコ人に取って代わられ、最後に黒人に取って代わられた。ポーランド人とユダヤ人は、たがいに完全に嫌悪しあっているが、非常にうまく交易をすることができる。かれらは、たがいの順応を、旧世界から新世界に移動させた。黒人によるゲットーへの最近の侵入は、一時的な関心以上の

3) *Ibid.*, p.37.

ものがある。黒人は、移民と同様に、都市のなかで人種的な居住地に隔離されている。経済的要因、人種的偏見、そして文化的相違が結びついて、黒人を分離させた。黒人は、ユダヤ人とイタリア人がそこにやってきたのとまさに同じ理由で、ゲットーの放棄された地区に流れ込んだ。かつての、そして都市の他の部分の白人の地主と住民とは違って、ユダヤ人は黒人の侵入にはっきりした抵抗を示さなかった。黒人は高い地代を払い、金払いが良かった。ゲットーの移民の多くは、まだ人種の分割線を発見していなかった。

ゲットーの推移と劣悪化は、地域の外観が日ごとに変化するのと同じ速度で進んだ。10年前にはリトアニアとカトリックの教会であった荒廃した構造物は、その後、シナゴグになり、いまではアフリカン M.E. [メソジスト・エピスコパル] 教会になった。店頭の色で塗られたミッションの表面塗装のしたに、「コーシャー肉屋」と「ドイツ薬局」と読める看板の痕跡がある。

古代のパターンに忠実に、ゲットーのなかで最も色彩豊かで活動的な地区は、露天市である。そこは、近代都市のショッピング地区よりも中世の市に似ている。しかし、この施設は、他のゲットー文化とともに、急速に衰退しつつある。ゲットーにおける移民の生活は制限されており、かれらはゲットーの不可欠の部分となっているので、ゲットーの存在に気づかない。ゲットーを発見し、逃げ出すのは移民の子どもたちである。数年前には着実だがゆっくりとした外へと向かう動きがあったが、いまではそれはゲットーを抜け出す真の殺到に発展した。なぜなら、その多様な活動と色彩豊かな雰囲気にもかかわらず、ゲットーはそれでも小世界であるからだ。それは、偏狭で宗派的な生活とともに鼓動する。その成功は、小さな尺度で測られ、その表出範囲は限られている。

移民は、ゲットーを離れてはじめて、自分自身と自分の地位を完全に意識するようになる。かれは、第二世代の居住地のもっと近代的で、ユダヤ的でない地域に住みはじめて、個人的自由と拡大の感覚を感じる。20年前に、最初のユダヤ人亡命者が、ゲットーから、約2マイル西にあるローンデールに侵入したとき、そこは、シカゴの第二世代の居住地を表しており、かれらは、アイルランド人とドイツ人と衝突した。アイルランド人とドイツ人は、近年、大草原であったところをなにか公園のようなところにしたのであった。ユダヤ人がそこを密度の高いアパートメントハウス地区に変えるのに約10年かかった。最初、かれらは借りることができなかった。アイルランド人とドイツ人が取って代わられたゲットーでの経験から、これらの住民は、家に待ち受けているものについての展望をもっていた。しかし、今回は、ユダヤ人は買収することができ、かれらはブロック単位で買収した。1910年までに、ローンデールは第二のゲットーになった。そのシナゴグは、マックスウェル・ストリートのもよりも少し近代的であった。ローンデールのユダヤ人のひげは、もとのゲットーのときよりも、少し短かった。そして、かれらのコートは少し短くなった。しかし、ローンデールはユダヤ的にはならなかった。ゲットーに残った住民は、ローンデールをあざけて、「ドイチュラント」とよび、その住民を「ダイチュクス (Deitchuks)」と呼んだ。なぜなら、かれらはドイツ人の様子を好んでいたからである。

しかし、ローンデールのユダヤ人は、ほとんど安心と満足を見いださなかった。かれらの以前の隣人は、同じ動機——仲間のユダヤ人から逃げ出し、よりユダヤ的でなくなることに駆り立てられて、ローンデールに新しい外観をあたえた。それは、ゲットーそれ自体ほど純粋ではないものの、紛れもなくユダヤ的であった。

ゲットーからの脱出の試みのなかで、部分的に同化したユダヤ人は、ゲットーがかれらのあとを追ってくることに気がついた。新しい脱出〔出エジプト〕が始まった。人間としての地位——ユダヤ人としてではなく成功した実業家や専門職として——を獲得するためにゲットーから脱出した人びとの計画は、他の人びとの類似した計画によって挫折させられた。それゆえ、それは、ファッショナブルなアパートメント・ホテルと郊外における第三の居住地をともなった。その地域が圧倒的にユダヤ人に占められるようになると、非ユダヤ人居住者は移動し、そしてユダヤ人は新たに追跡を始める。自分自身よりもユダヤ的な仲間のユダヤ人の存在に苛立つようになると、ユダヤ人は、ゲットーの向こうに現れるより自由な世界を垣間見ることはめったにない。かれは、うんざりし、愛想を尽かし、逃亡を再開する。

この過程で、かれは性格と制度を変える。しかし、内部と外部からのあらゆる崩壊に向かう諸力にもかかわらずコミュニティを団結させているものは、たんに新しい移民によるゲットーの補充だけではなく——これは減少しつつある要因であるから——、むしろ逃げ出したものの、その逃亡の結果に失望し幻滅した人びとのゲットーへの回帰である。かれらは、外部世界が冷たく、自分たちの要求に反応しないことに気づき、ゲットーの暖かさと親密さに回帰する。最後に、ユダヤ人コミュニティは、外部世界がゲットーを実体としてあつかってきたという事実によって、保持されてきた。ユダヤ人問題があるとすれば、それは多くの脱出の試みにもかかわらずゲットーが持続しているという事実にある。核が存続するかぎり、それは、空間的・感情的に遠く離れた人びとでさえ所属し、かれらが同一化するコミュニティ生活の象徴として役立つであろう。

個人としてのユダヤ人は、かならずしも同化への道が阻止されていることに気づくわけではない。かれらは敵ばかりでなく友もつくる。文化的・人種的集団間の接触は、必然的に、摩擦だけではなく調和も生みだす。そして、妙案や既成のプログラムと行政装置によって一方を促進し、他方を妨げることができない。相互作用は生活であり、生活は成長であって、どんなに合理的であろうと、この動的な過程を考慮しなければ、統制したり指示したりする試みを受けつけない。地位を求める競争のなかで、パーソナリティが生じる。ユダヤ人は、他のあらゆる人間と同様に、自分の独自の性格をこの競争に負っている。そして競争が変化し弱まると、その性格も変化し、ことによると消滅する。

ユダヤ人コミュニティ——異質な文化的要素からなり、われわれの都市の分離された地域に分布する——をコミュニティにしているものは、共同して行動する能力である。それは、文化的コミュニティであり、近代都市が提供しなければならない共同生活へのアプローチに近いものを構成している。ゲットーは、中国人、黒人、シシリー人、ユダヤ人のどれであろうと、生態学的現象としてだけでなく、社会心理的現象として見た場合にはじめて完全に理解される。なぜなら、それはたんに物理的事実であるだけでなく、心の状態でもあるからだ。

*Wirth, Louis. 1964. "The Ghetto." In *On Cities and Social Life: Selected Papers*. Chicago: University of Chicago Press. First published in the *American Journal of Sociology*, XXXIII (July, 1927): 57-71.